

Educational Reform and Synthetic Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/673

教育改革と「総合的な学習」

——音楽科がかかわる「総合的な学習」の取り組み——

篠原秀夫

Educational Reform and Synthetic Studies

——One View about Synthetic Studies related to Musical Subject——

Hideo SHINOHARA

はじめに

21世紀に向けての教育改革が急速な勢いで進められている。その基本的な方向は、第15期中央教育審議会の第一次答申（平成8年7月）、並びに第二次答申（平成9年6月）でほぼ決まった。この答申を受けて、教育課程審議会の「中間まとめ」（平成9年11月）、さらに「答申」（平成10年7月）が公表され、教育の全体像が見えてきた。具体的な内容は、新しい学習指導要領が平成10年の11月に公表され、平成14年度からの実施に向けていよいよスタートを切ることになった。

完全週5日時代の小、中、高校では授業時間数が週当たり2時間（単位時間）削減されるとともに、基礎・基本を確実に身につけさせるために、小・中学校では教育内容を厳選し、現在の内容から約3割が削減される。また、自ら学び、自ら考える力の育成を図る「総合的な学習の時間」を新たに設け、小学校3年生から高校まで必修とすることが打ち出された。しかも、この「総合的な学習の時間」については平成12年度から前倒しで実施されることになった。小学校では週3時間、中学校では週2時間以上占めることとなった。

中教審の答申の中で、「総合的な学習の時間」を設けることが述べられて以来、「総合的な学習」についての関心が高まり、全国各地で開かれている種々の授業研究会も、その研究テーマは、ほとんどが「総合的な学習」に関わるものばかりである。各教育雑誌も、「総合的な学習」

の特集を様々に組んでいる。音楽科に関連した「総合的な学習」の実践報告や実践プランも発表されるようになった。

しかし、こうした研究会での議論に参加したり、実践報告や実践プランを検討していく気づくことは、「子どもたちに何をどのように学習させるか」ということばかりが問題にされていることである。今回の改革で、なぜ「総合的な学習」が提起されているのか、その背景や意味を見直すことも大切である。「総合的な学習」を単に新しい学習内容として、また具体的な教育方法として実践することではなく、教育実践の根底にある考え方を見直すことではないであろうか。

そこで本稿では、「総合的な学習」の取り組みに関して、教育改革と関連させながら考察を行う。また、音楽科がかかわる「総合的な学習」の取り組みを取り上げながら、主体的に追求していく力の育成を中心に考えてみる。

I. 教育改革と「総合的な学習」

(1) 全面的・構造的な教育改革

文部省は、21世紀に向けて、どのような改革を進めようとしているのであろうか。

今回の改革について、一連の諸答申(1)（中教審答申、教課審答申、大学審答申など）からは、次のような改革の全体像が見えてくる。

①生涯にわたる知的探究心の育成（初等・中

等教育では、「自ら学び、自ら考える力」の育成)をどのように進めていくか。

- ②その学びのために、学校教育体系をどう再編するか。
- ③さらに、こうした学校づくりをすすめる際の組織運営体制をどう改革するか。
- ④また、そうした教育を実際に担う教師の教育をどう進めるか。

今回の改革では、①の生涯にわたる知的探究心を改革のめざす中心に据えている。これはとりも直さずこれまでの「学び」のあり方を見直すことであり、そこに本気で改革に取り組もうとする姿勢を見ることができる。こうした教育の改革であるが故に、当然のことながら改革は全面的、そして構造的なものとなっている。しかもそれが小学生から大学院、さらには生涯学習をも射程においていた一貫した論理で言われていることは、これまでの改革にはなかったものといえる。

(2) 「総合的な学習の時間」

今回提起された「総合的な学習の時間」に関して、諸答申の中ではどのように述べられているのであろうか。

創設の趣旨については、教課審答申（平成10年7月）の中で、次のように位置づけられている。

「各学校が地域や学校の実態等に応じて創意工夫を生かして特色ある教育活動を展開できるような時間」

「『生きる力』は全人的な力であることを踏まえ、国際化や情報化をはじめ社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施するための時間」

「自ら学び自ら考える力などの〔生きる力〕をはぐくむことを目指す今回の教育課程の基準の改善の趣旨を実現する極めて重要な役割を担うもの」

また、子どもたちの追求的な学習を実現する方法については、中教審第一次答申（平成8年7月）や教課審答申（平成10年7月）の中に、かなり具体的に提起されている。

「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」の育成。

「問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育成すること」

「自己の生き方について自覚を深めること」

「各教科等それぞれで身に付けられた知識や技能などが相互に関連付けられ、深められ児童生徒の中で総合的に働くようになるもの」などである。

さらに、取り組んでいく学習内容に関しては、教課審答申（平成10年7月）の中で、「例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題など」が提起されている。

(3) 「学び」のデザインを変える

子どもたちにとっての「学び」とは何であろうか。現在の学校は、はたして子どもたちにとって学びがいのある場所になっているのであろうか。今、大切なことは、子どもたちが追求的な学習に取り組めていない現実を、いかに変えていくかということではないであろうか。

子どもたちにとって意味のある「学び」を実現するためには、学校教育全体の改革を進めることが必要で、当然のことながら「総合的な学習の時間」だけで学校における学習が転換していくわけではない。「総合的な学習」でも「教科」でも、子どもにとって意味のある追求的な学習をめざすことが大切なのである。

つまり、「総合的な学習の時間」での追求と共に、「教科」での追求も考えていくことが必要であり、「教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間」の全体のデザインと相互の関連を作り出す必要があるといえる。小学校では6年間の学びの見通し、中学校・高校では3年間の学びの見通しを教師が構想しつつ、子どもたちと共に作り出していくことが重要になる。「総合的な学習」は、学校教育全体の「学び」のデザインを変える突破口のようなものである。

II. 子どもの求めから始まる「総合的な学習」

現在、音楽科がかかわる「総合的な学習」の取り組みがさまざまな形で行われ、教育雑誌などで実践報告や実践プランが取り上げられている(2)。

「総合的な学習」の研究先進校で多く見られるのが、ミュージカルやオペレッタなどの音楽劇の活動を展開する実践である。あるテーマで取り組んできた「総合的な学習」のまとめとして取り組む学校もあれば、最初からオペレッタの創作・上演を目的に取り組んでいる学校もある。これらの活動は、音楽的な表現だけでなく、言語的な表現、身体的な表現、造形的な表現など、表現に関わりを持つさまざまな分野が力を合わせて総合的な表現活動を行うものである。

また、あるテーマに取り組んでいく中で、部分的に音楽科がかかわるような実践もある。例えば、「ふるさとを見直そう!」というテーマで取り組み始め、その地方の歴史や文化財を調べたり、伝統的な行事を調べたり、昔から伝わっている民謡やわらべうたを調べ、それを表現(歌唱)したり、さらには伝統工芸にも挑戦していくという展開で、ふるさとをいろいろな角度から学んでいくという実践である。

さらには、音楽科を中心に、いくつかの他教科をつなぐ横断的な学習に取り組んでいる実践や、学校行事の中でも特に修学旅行と音楽科を関連させて取り組んでいる実践など、さまざまである。

「総合的な学習」は、こうでなければならないというものではない。さまざまな実践があつてもよいはずである。平成10年12月に告示された新学習指導要領には次のように書かれてある(3)。

「3 各学校においては、2に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」とある。

例として上がっている、国際理解、情報、環

境、福祉の4つのテーマが前提とされている実践が多く見られるが、これらのテーマにこだわりすぎると、「総合的な学習」が1つの教科のようになってしまう恐れがある。いずれのテーマも重要ではあるが、はじめにテーマありきになってしまうのである。むしろ、下線をつけた部分にあるように、その地域に存在する学校が、自らの存在証明として「特色ある学校づくり」を進める中で、「総合的な学習」の内容づくりをしていくことが大切に思われる。

どのような実践であれ、「総合的な学習」は、テーマの設定がポイントになる。このテーマ設定は、子どもたちと教師と一緒に考えながら決めていくものであるが、できる限り子どもたちの求めを大切にしたいものである。子どもたちにとってやりがいがあり、継続性・発展性のあるテーマかどうかの判断が必要になる。教師の見通しと子どもたち自身の見通し、また子どもたちの意欲・興味・関心との緊張関係も大切である。

「総合的な学習」は、子どもたちの求め(發意)があり、その求めを実現するために子どもたち自身が主体的に展開していく学習である。どのようなテーマであっても、可能な限り子どもの求めに応じた学習を組み立て、子どもの自主性、主体性に任せて活動を展開し、その求めを実現できるような学習にしていくことが望まれる。

また、活動のきっかけを与えるのは教師であったとしても、活動を進めていくうちに子どもたちが活動を自分たち自身のものとしてとらえ、意欲的に、主体的に自ら考えて行動できるような活動の組み立てになっているか、ということを教師は常に配慮することが大切である。

III. 主体的に追求していく力の育成

では次に、どのようにしたら「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断していくような」主体的に追求していく力を子どもたちに培わせることができるであろうか。

福井大学(筆者前勤務校)の教官と福井大学教育地域科学部附属中学校の教官で、10年以上にわたって共同研究をしてきた中で、追求的・発展的な学習プロセスは、次のような基本的なモデル（サイクル）ではないかと考えてきている。

基本的なモデルとは、子どもたちの発意（学びたい、やってみたい）→構想（課題の設定、学習の構想）→遂行（探究する、創造する、表現する）→省察（振り返り、自己評価、相互評価）・・・というような学びのサイクルの展開である。

図1と図2は、この学習プロセスのモデル図である(4)。

主体的に追求していく力は、この発意・構想・遂行・省察にいたる、一連の学習活動のサイクルを、実際に何度も発展的に積み重ねていくことを通して、年輪を重ねるように徐々に培われていくものである。

次章（IV.）で取り上げる実践は、この学習プロセスに基づく、北典子氏の実践で、「オペレッタづくり」を柱とした総合的な音楽学習である。

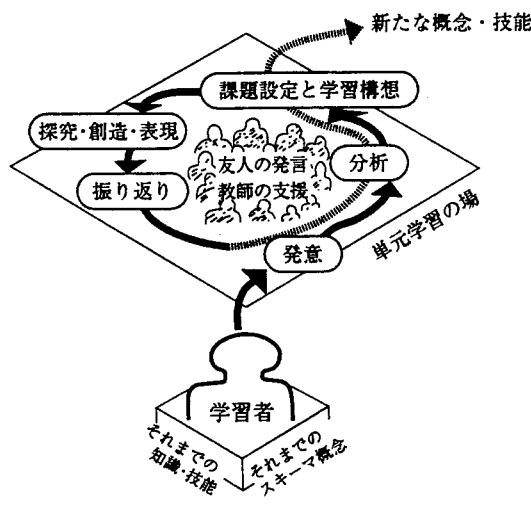


図1 思考過程の練り上げモデル

これまでの学びのような、その都度与えられた課題を与えられたやり方でこなすというパターンでは、当然ながら主体的に追求する力にはつながらない。また、10~20時間くらいの単発的なテーマ（単元）による「総合的な学習」ではなかなかこうした力はつきにくい。次の活動につながっていかない、次の活動に発展しにくいのである。むしろ、1つのテーマを何サイクルか取り組んでいくうちに、少しづつ培われてくるものである。

新しい活動に初めて取り組む際には、経験のある人が段取りしてくれた手順をなぞったり、あるいは試行錯誤を繰り返して手探りで探ったりすることになる。初めての経験を生かして、そこでの試行錯誤や、なぞるようにして進めたこととその省察を踏まえて、自分たちの活動を自覚的に再編成していくことになる。このような営みを通して、これまでの水準を越えた力が培われていく。

北氏の実践においても、初めて創作音楽ドラマに挑戦した時に手探りで進めた実践とその組織は、次のオペレッタづくりの展開に際しては、

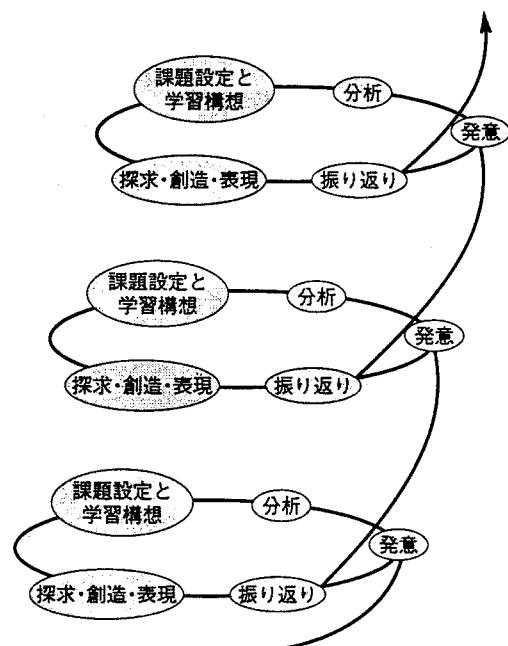


図2 学習過程の練り上げモデル

反省的にとらえ返されながら、活動を構想・組織化していく時の共有の拠り所として生かされていく。

子どもたちは、先輩たちに支えられ、なぞつたことをもとに、今度は自分たち自身の判断で展開していく。試行錯誤したこと、失敗したことをもとに、その省察に立って活動を組み換えていく。2度目、3度目の活動の展開において、1度目のサイクルが基盤として生かされ、新しい活動の力を自分たちのものとしていくことになるのである。

子どもたちにとって学びが連続すること、意味をもってつながることが大切であり、テーマが変わっても、次のテーマに今まで学んできたことが意味をもって連続すること、生かされることが重要になる。

こうした学びの連続的・発展的な展開は、子どもたちの課題設定や学習構想を修正したり反復することにつながり、子どもたちが自分たち自身の変容や成長を自覚することができる。また、子どもたちが見通しをもって自主的に学習活動を展開していくことができ、少しづつ質の高い学びにつながっていく。

「総合的な学習」では、何に取り組んでいくか、ということも大切ではある。しかしそれ以上に、学びのサイクルをいかに実現していくかということが大切になると考える。

IV. 北典子氏の実践

北氏は現在、福井県福井市立足羽中学校に勤務されているが、取り上げる実践は、平成11年3月まで勤務されていた福井大学教育地域科学部附属中学校における実践である。「オペレッタづくり」を柱とした総合的な音楽学習である。オペレッタづくりは、別段珍しいものではない。しかし北氏の実践は、単発的なオペレッタの創作や上演をめざすものではない。

北氏は、3年間の音楽活動を系統づけ、総合的なすべての力の育成が可能な音楽活動、それこそが「オペレッタづくり」であると捉えてい

る。日常の総合的で発展的な音楽学習の延長上に創作活動を位置づけ、1年生から3年生までの3年間の実践の見通しと計画のもとに進めるこことをねらいとしている。

北氏は、オペレッタの意義について次のように述べている(5)。

「オペレッタづくりは、

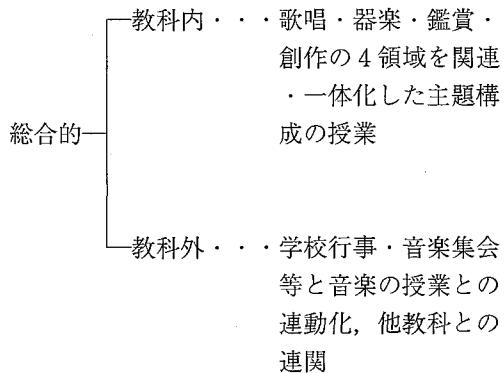
- ・生徒の個の能力や個性に応じて多面的な活動の経験が保障できる。
- ・創造過程においてあらゆる音楽経験（歌唱・器楽・鑑賞・創作等）が生かされる。
- ・演奏表現にむけての活動過程の中で、それぞれの活動は生徒の『より良いものを表現したい』とする意欲によって、表現の充実が約束される。
- ・こうした音楽経験は、生徒が次の音楽活動に取り組む意欲と目的意識を高め、さまざまな表現技能の上達も促すことになる。

教育課程の編成の流れから見れば、教師の予め設定した路線に沿った学習であるかもしれない。しかし、「オペレッタづくり」を始めそれぞれの創作活動では、子どもたちの興味・関心から発展し、生徒たちが自ら学習課題を見つけて出し、自主的な活動を展開させている。

平成10年度の3年生は2年生の10月から「オペレッタづくり」がスタートした。実行委員会を中心に話し合いがもたれ、『福井再発見』というテーマからスタートした。平成10年3月の東京への修学旅行に関連させ、「東京であるさと福井のよさを伝えよう、福井をアピールする作品を創る」ということになった。約半年の期間、いろいろ糸余曲折があったが、最終的には、音楽ドラマ『未来～私たちにできること～』(ロシアタンカー重油事故とその後の甦った福井の海を取り上げている)を仕上げ、3月17日修学旅行の初日、東京の代々木公園の野外ステージで公演を行ったのである。その後、この3年生は、新しいオペレッタに挑みたいということになり、東京で行った調査活動を生かし、東京と

福井を比較する内容を盛り込んだオペレッタを創り、6月の中旬、福井市連合音楽会で発表を行っている。

北氏の実践の場合、「総合的」とは、次の2点から構想する学校における音楽活動全般を意味している。



そして北氏は、生徒が3年間の音楽活動の見通しを持って授業に取り組めるような教育課程の編成・開発に取り組んでいる。

北氏の教育課程の編成に当たっての基本的な考え方は次のとおりである(6)。

- ①学年の枠組みをはずし、3年間を見通した流れとする。
- ②「オペレッタづくり」に直結する創作方法の理解や技能の習得を図り、ひとつひとつ の主題がスパイラルに発展・深化するよう位置づける。(図3参照)(7)
- ③「オペレッタづくり」の系統的な流れの中で、3年間のすべての音楽活動が関連する学習内容を用意し、音楽経験が拡充するように配列する。(図4参照)(8)
- 第1段階から第4段階に関しては資料1(9)を参照。
- ④感動体験の共有（自己・対象・他者との対話の深まりを確認する）を図る仲間との学び合いの場が生じる学習活動を設定する。
- ⑤学年あるいは全校生徒の前で授業内での音楽活動の発表を認めたり、新たなめあてをもったりする交流の場を、教科外活動（行事や音楽集会）と連動するように設定する。

前述の音楽ドラマもオペレッタも、いずれもリハーサルをみせてもらう機会に恵まれた。できればがすばらしかったことは述べるまでもない。勿論、それをここで強調したい訳ではない。

北氏の実践の特徴を取り上げてみる。

第一は、中学校3年間の音楽学習の中心に、創造的な表現活動を据えていること。しかも、さまざまな音楽活動が核である「オペレッタづくり」とリンクしながら展開し合う教育課程を開発させていることである。

北氏は、生徒自身の学びの経験が生きて働く主体的な音楽活動とは、「生徒自身が創造した作品を、自ら演奏表現する音楽活動」にほかならないと考え、その条件を満たし、なおかつ総合的な音楽活動が経験できる活動は「オペレッタづくり」と考えているのである。

第二の特徴は、音楽の授業と学校行事・音楽集会などとの連動化（総合化）である。

北氏は、教育課程を編成する際に、学年の区切りを外し、大まかに4段階の展開の仕方を想定し、生徒自身が3年間の流れを見通せるような工夫を行っている。その顕著な例が学校行事・音楽集会である。この中学校の場合、文化祭や市の連合音楽祭などの他に、年間5回の音楽集会が開かれる。(図5を参照)(10)

この音楽集会の中で、上級学年の学習活動の表現の場に立ち会うことで、これから音楽活動の見通しを持つことができる。「2年生はこんな活動をしているんだ」「3年生はこの時期、オペレッタを創っているんだ。すごいな」など。あるいは同じ学年の演奏から、新たな刺激を受けたり、下級学年の演奏から、新たな発見がある場合もある。

授業で創作したオペレッタ作品や、作曲作品などを全校生徒の前で演奏発表することで、1～2年生の音楽活動での目標が、1学期のうちにできあがるようになる。そして「3年生になつたら、自分たちはこんな作品を創造したい、演奏したい」という思いを3年生になるまで心に温めるきっかけとなるのである。生徒の音楽へ

図 3

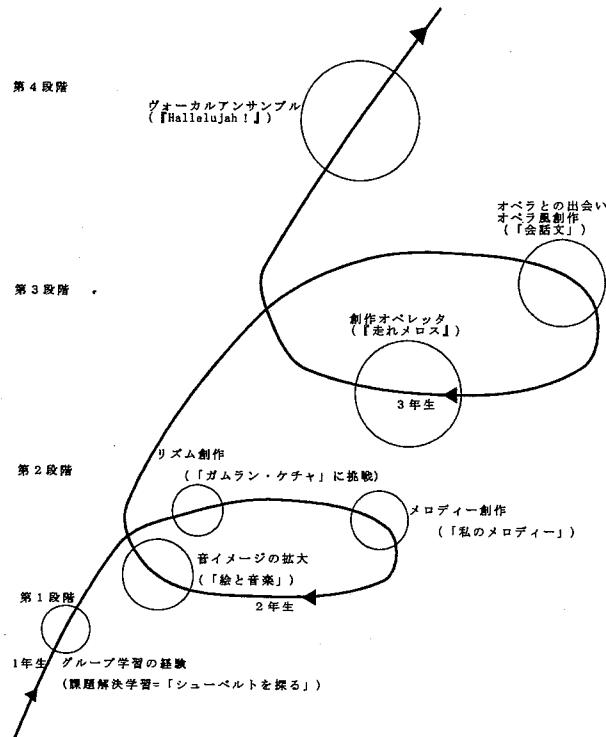


図 4

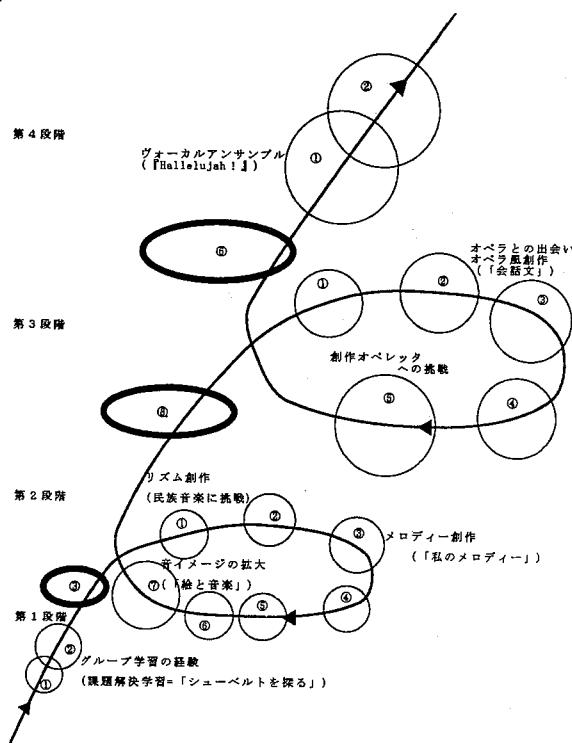
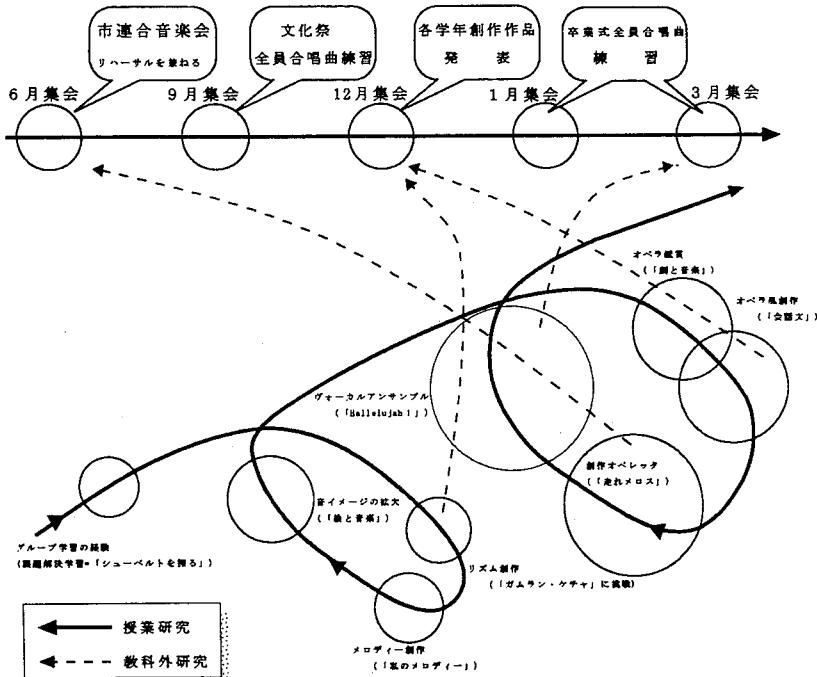
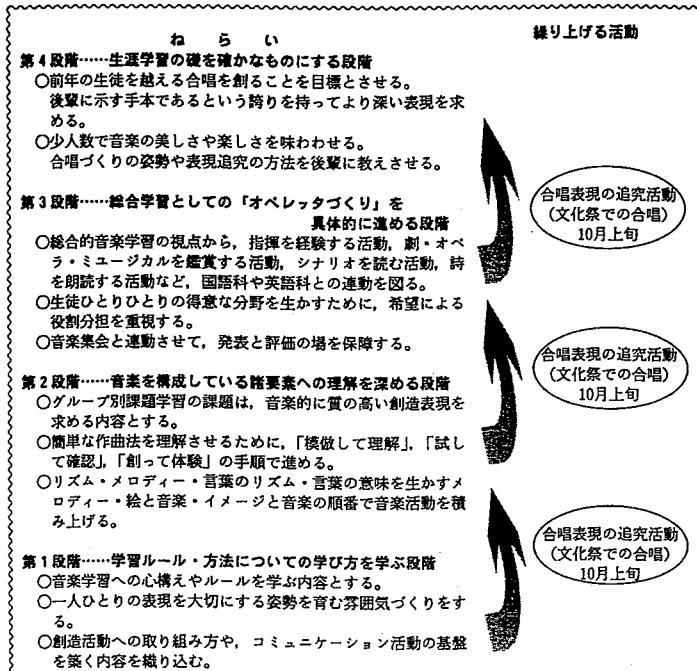


図 5



資料 1



の興味・関心・意欲も高まっていく。またこうした、興味・関心・意欲といったものが、オペレッタづくりのきっかけにつながったり、テーマ設定にも有効に結びついていくのである。

今回取り上げた北氏の実践は、音楽がかかわる「総合的な学習」の取り組みに関して、大きな示唆を与えてくれるだけでなく、学校行事などの学校文化という学びの配置について考えるヒントを与えてくれている。

「総合的な学習」で取り組んでいくテーマ、内容は、さまざまなものがあつてよいはずである。何か1つのモデルがあつたり、「これをすることが『総合的な学習』である」というようなものではない。しかし、たとえどのような内容であつても、「総合的な学習」は、子どもたちの興味・関心からスタートし、子どもたちの求めを実現していくために、子どもたち自身が主体的に展開していくことが望まれる。「総合的な学習」は、教師と子どもが共に取り組んでいく本格的な追求活動といえる。

〔注〕

- (1)中教審第2次答申「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」1997.6
- 教養審第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」1998.7
- 教課審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学

校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」1998.7

中教審答申「今後の地方教育行政の在り方について」1998.9

大学審答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」1998.10

教養審第2次答申「修士課程を積極的に活用した教員養成の在り方について」1998.10

(2)主なものとして、

- ・音楽科がかかわる総合的な学習 実践事例32
教育音楽別冊 音楽之友社 1999.3
 - ・音楽科がかかわる総合的な学習1. 地域から学ぶ 教育音楽別冊 音楽之友社 2000.5
 - ・音楽科がかかわる総合的な学習2. 表現をする 教育音楽別冊 音楽之友社 2000.8
- (3)小学校学習指導要領「総則」第3 総合的な学習の時間の取扱い 平成10年12月14日 告示
- (4)福井大学教育地域科学部附属中学校研究会『探究・創造・表現する総合的な学習—学びをネットワークする—』 東洋館出版社 1999.p.57
- (5)北典子「主体的・創造的な表現活動を構想・追求させる総合的音楽学習の試み」福井大学教育学部附属中学校 研究紀要 第26号 1997.p.109
- (6)注(5)の文献 p.109~p.110
- (7)注(5)の文献 p.111
- (8)注(5)の文献 p.113
- (9)注(5)の文献 p.112
- (10)注(5)の文献 p.127